



待していること。好奇心、プライド、怯え、そして少しの欲。私に微笑みかけてくれた人々の目から色んな心のメッセージを受け取った。心を読めるわけではないけれど、考えていることがなぜかすぐ伝わってきた。うまく言えないけれど、これが父の言う「綺麗で真っすぐな目」なのかなと思った。みんながみんな良い人なわけがないし、そもそも良い人の基準なんてわからない。でも人に対して真っ直ぐに向き合う心と目を持つ人が多い国ではあると思う。その根底には、この国の人々の心に深く根付いた敬虔な仏教徒としての精神を感じた。「来世を幸せに生きるために現世で徳を積む」という教えのもと人々は生きている。「前世で悪事を働いたから今世は貧しい。だから今世で徳を積み来世は幸せになれる。」この考え方を人々が本気で信仰しているから、貧しくても人を妬まないし、犯罪に手を染めない。等身大で生きている。これがミャンマー人の人柄が称えられる由縁ではないだろうか。

同時にいまミャンマーは貧しさから立ち上がろうとする国になりつつある。パオ族は「食べ物やお金よりも技術や教育をください。でないと私たちは口を開けて支援を待っているだけの民族になってしまふ」といった。なんと誇り高く力強い言葉だろう。今世の貧しさを諦めるのではな

く、自分の村と人々を救うべく立ち上がる人々がいる。支援をする私たち日本人にその認識と覚悟はあるのだろうか。

学生の自分の無力さをひたすらに感じた。ミャンマーへ来てまで綺麗なホテルや美味しい食事を求める大人たちに呆れ、あなたたちは何しに来たんだ、どこへお金を使ってるんだと言いたくて仕方がなかったが、結局お金があるのは大人。「100万円で学校1つ建てられる。」大人たちが本気を出せば簡単な金額でも、私には途方もない金額。じゃあ私こそ何しに来たんだ、ここでは日本の学生代表なのに、と毎晩ホテルで自分を責めては泣いた。

学生の自分にできることは何か、帰国してからでもひたすら考えた。まだ答えははっきり出ていない。でも今の私にすぐできることは『情報発信』だと考えている。

みんなにミャンマーという国を知ってもらいたい。「ミャンマーってどんな国?何しに行くの?」と聞いてきた友人たちに、ミャンマーの現状を知ってもらいたい。1944年のインパール作戦で多くの日本兵がミャンマーの少数民族に命を助けられたって話、どれくらい日本人が知っているだろうか。私自身も知らなかった話だから、ちゃんと調べて、わかりやすく伝え

て、ミャンマーという国の印象を変えたい、身近に感じてもらいたい。

はじめはFacebookやtwitterで私の周りの人に向けて発信していこう。こないだ友達にミャンマーの少数民族の話をしたら涙流しながら聞いてくれた。夏にインターンでライターの仕事させてもらえたらミャンマーのこと書きたいな。今の私はこの段階。お金はないけど時間はある大学生の私にしかできない「情報発信」これから頑張っていきたい。



最後に、姉の言った通り私もこのツアーで価値観、人生観、なにもかもが変わった。人の綺麗な目の意味が分かった。ミャンマーという国が持つかけがえない魅力を見つけた。こんなに考えさせられる旅、はじめてだった。できるならもっと多くの学生にこのツアーに参加してもらいたい。

このツアーに学生をもっと参加させたいとお考えなら、今回のツアーには足りなかったもの、余分だったもの、改善すべきものが沢山あったのではないのでしょうか。学生にとっては綺麗なホテルやレストランよりも、もっとローカルなミャンマーの人々の生活に寄り添ったツアーの方がずっとかけがえのない人生経験になると思います。

長すぎる文章なうえに散々文句を書きましたが、このツアーを企画・催行してくださった方々、生意気な私の意見を受け止めて論してくださったツアー参加者の皆さま、そしてミャンマーに連れてきてくれた父に心から感謝いたします。ありがとうございました。

JAMAHA NEWS

JAPAN & MYANMAR ASPIRATION HOYU ASSOCIATION

2016.6 vol.7

日本ミャンマー豊友会

将来の子供たちが共存共生のできる豊かで平和な世界へ



ミャンマーの新情勢については、最近ではマスコミなどで随分詳しく報道されておりご存知だと思いますが、60年ぶりに軍事独裁政権が終わり、一応合法的にスー・チー派のNLDに政権が引き継がれました。これに伴い省庁の整理統合が行われ、担当官僚も交代になると思われます。落ち着いてくるのは夏以降くらいからでしょうか?もうひとつの変化は日本側NPOの所轄官庁が国税局から愛知県に変更になることです。認定法人であることには変わりはなく、県への新規の申請となり、年度締め日が今季から変更になる可能性があります。

今季の方針であります。従来の孤児院の職業訓練室への支援(トンテ、ドーピン)は変更なく行うつもりであります。並びにPAO族の村々への無認可保育所の建設協力は、相手側の要請が数多くの村から寄せられると同時に、完工式に参加して感激なさった方々の支援申し出があり、今季は3ヶ村同時着工ということになりました。PAO族の高校生への奨学金の基金積立は5年間継続し、一定の金額(邦貨300万円)になって3箇所の高校で順調に回っておりますので、ウイッタカ孤児院の大学入学のための予備校への費用負担を除いて一旦休止いたします。他にはドリームトレインへの慰問、楽器寄付、既に文科省に寄贈した360本のピアノの稼働の支援が継続事業として残ります。今季初の事業は先期に支援決定したインレイ湖畔のマインタック村へのゴミ焼却炉の寄贈

設置、試運転稼働とゴミの分別収集の教育です。最初は子供たちのゴミ拾い活動を指導してみえになった4人の先生方を知り、大工道具やゴミ箱の設置を支援し、インレイの浄化作戦の参考に水保や諏訪湖のよみがえりの参考資料をお渡しすることから始まりました。地区のホテル協会も興味を示し、広がりを持ち始めています。この事業に伴い、初めて某財団から貴重な100万円近くの補助金をいただくことができました。

また3年後の着工を目指して、孤児のための、少数民族の若者のための職業訓練所の建設準備金を昨季から積み立て始めました。今までの支援事業に関しましては多くの会員様のご協力で自立支援事業をすることができました。本当にありがたいことと感謝しております。しかし、今回の事案に関しましては支援金の総額も違えば、事務局体制も一層充実させていかなければなりません(今季から事務局次長として、日本語もペラペラなマパレイさんがボランティアとして参加してくださいます)。民主化以降、ミャンマーに進出された企業にも賛同していただき、日本の若年労働者の不足や、講師としてのシルバー人材の派遣等、在ミャンマー日本大使館をはじめとして、日本のお役所にもお願いするつもりであります。皆様方の人脈やご協力を切にお願いする次第です。

またNPOの周辺で時々お願いされるビジネスにも協力させていただけるよう、別組織もミャンマーの方々と作らせて

いただく予定です。孤児たちやPAO族の人たちの仕事作りになればとの想いからで、現在ソロバン袋の試作にかかっているところです。小型日本語学校もマパレイさんを中心に開設準備をしております。

なお総会は5月28日10時半より名古屋市港区(港栄1丁目8-23地下鉄港区役所下車3分)の邦和セミナープラザで開催させていただきます。どうぞふるってご参加ください。当総会ではミャンマーからご来場なさる起業家の社長様の講話を予定しております。

秋のスタディーツアーは11月19日出発の25日帰国で詳細を記しております。保育園の開所式、バガン市図書館へのパソコン寄贈式、ワチエの病院での吉岡秀人先生の講演等を予定しています。もちろん目玉の観光場所にもゆきます。詳細がまもなく発表できます。

会費の納入をお願いしたいと存じます。ゆうちょ銀行以外の金融機関からの送金やインターネット送金が普及してまいりましたが、ゆうちょからお振込みできますと住所氏名が確認できますので、事務作業が楽になります。お願いできれば幸いです。

お振込先

郵便局 振替口座 00820-5-135506
特定非営利活動法人日本ミャンマー豊友会
三菱東京UFJ銀行 中村公園前支店
普通 0027522
特定非営利活動法人日本ミャンマー豊友会

日本ミャンマー豊友会の日頃の活動は Facebook をご覧ください【<https://www.facebook.com/JAMAHA.jp>】

参加者 第25回 ミャンマースタディーツアー
募集 [11月19日から11月25日ごろ予定] 詳細はFacebookまたは、ホームページをご覧ください。



〒442-0826 愛知県豊川市牛久保町城下 73 番地 (大木産業株式会社内)
Tel. 0533-85-3358 Fax. 0533-85-4986 e-mail • [jahamahajapan@gmail.com](mailto:jamahajapan@gmail.com)
<http://www.hoyukai.com/myanmar>
Facebook • <https://www.facebook.com/JAMAHA.jp>



第23回 ミャンマースタディーツアー〔2016年3月29日▶4月3日〕 レポート



【田畑里紗】

父がはじめてミャンマーを訪れ帰国した日、私たち家族に興奮気味に聞かせてくれたのを覚えている。「ミャンマーはいい。あんなに人々の目が綺麗でまっすぐな国はそうそうない。」と。

5年前、その父とともに姉がミャンマースタディーツアーに参加した。帰国後彼女は私たち家族に熱く語った。「自分のこれまでの価値観もこれからの生き方もなにもかもがこの旅で変わった。」と。

ミャンマーにいったい何があるっていうのだ。この5年間ずっと疑問だった。そしてこの疑問を自分の目で確かめて解決すべく、ついに今回私は父とともにこのミャンマースタディーツアーに参加することを決意した。

出発日を間違えて、「いまごろは飛行機に乗っているつもりだったんだけどなあ」と言いながら成田でお寿司を頬張るというボケっぷりをしょっぱなから発揮した田畑親子のミャンマースタディーツアーがはじまる。

ヤンゴンに到着して飛行機を降りてすぐ、この国の匂いを感じた。国にはそれぞれ特有の匂いがあるというが（日本は醤油の匂いらしい）、私はこの東南アジア独特のちょっと埃っぽくて食べ物やお香の混ざったような匂いが、異国に来た感じがしてすごく好きだ。

ホテルでツアーの参加者と合流する。「あれ？学生わたし1人だけ？」ツアーの情報を何も知らなかったのだが、どうやら学生どころか若造は私一人だけのようだった。

た。他はみんな大人。（うわあ、おとなしくしよう……）と思っていた、ツアー二日目くらいまでは。ツアーが進むにつれ、学生の自分が大人に混じってこのツアーに参加している意味を考えるようになった。そして大人の方々の優しさに甘えて、好奇心のままに行動してみたり偉そうに意見をぶつけてみたりもした。なんだか自分が日本の学生代表としてここにいるような気がした。学生目線でミャンマーという国をしっかりとこの目に焼き付けて日本に帰らなきゃいけない。この漠然とした使命感のようなものはツアーの間ずっと抱き続けていた。

これまで東南アジアは数か国旅行してきたが、東南アジア最貧国の1つと言われるミャンマーの現状は凄まじかった。ヤンゴンは都会化が進み、車が道に溢れ、人々はスマホを使っていて、一見他の東南アジア諸国となんら変わらないように思えた。観光地やレストランでバスを降りると、たいいてい物売りの子供たちに囲まれる。これも他の国でも見られる光景ではある。だがこの国では物売りしている子供たちが異様に幼かったり、求める値段がそこまで高くなかったり、子供たちが売ろうとしている物が自分で画用紙に描いたイラストだったりすることに違和感を覚えた。学校には行っていないのだろうか。日本人だから値段をふっかけるという考えにはならないのだろうか。売る物すら持っていないから絵を描いたのだろうか。この子たちの親は何をしているのだろうか、働いているのか、遠くで子供がお金を貰うまで見張っているのか。でもこの子

わりと綺麗な服着ているなあ、さっきの子は端切れを合わせたような服に裸足だったからこの子はまだマシなのかなあ。次々に近寄ってきて私を囲む子供たちを見つめながらこんなことを冷静に考えてしまう自分に嫌気がさした。子供たちにお金を渡してもなんの救いにもならないのだと自分に言い聞かせて、代わりに日本から持ってきたミルクィを渡す。タイやマレーシアではこの手法は舌打ちされたり明らかに落ち込まれたり後ろに隠れていた親に睨まれたりすることがあった。でもミャンマーの子供たちはミルクィに大喜び。私の渡した数が子供たちの数に合わないことが分かると、子供たちは私に他の子にも渡すよう頼んで来たり、ミルクィをちぎってあげようとしたりしていた。後に述べるミャンマー人の心の在り方を、貧しい子供たちから感じた瞬間だった。

また、別の日の夜のことだ。レストランに向かう途中、道端の車のそばに人影を見つけた。なんだと思ってよく見ていると女性が座り込んでいた。腕の中にはぐったりとした赤ん坊。下を向いて動かないこの親子を見た瞬間、正直ゾクリとした。ツアーに参加していた女性が堪らずに駆け寄ってお金を渡しに行っていた。私は足がすくんで動けなかった。日本で、死に近いものから隔離されて生きている私にとって、あの光景はあまりにも恐ろしかった。何もできなかった。あれがミャンマーの貧困の現実なのに。私たちは視察団員としてこの貧困に苦しむ子供たちを、その親を、救うべくこの国に来たのに。ミャンマーに来て以来、毎日レストランで美味しいごはんを食べて綺麗なホテルに泊まってバスで移動していた私だが、ようやくこの国が抱える貧困に直に触れた気がした。あの赤ちゃんは今生きているのだろうか。あの女性は。思い返すだけで心がえぐられるように痛くなる。



そしてこのスタディーツアーでの一番の大仕事。支援をする少数民族の村の優先順位を決めるため、村の代表者のプレゼンテーションを聞いた。それぞれの村の平均年収は日本円にしておよそ3～4万円。村人の仕事の7割が農作業。両親ともに毎日畑に出ないといけないが小さな子供がいる。家に置いていけないから畑に連れていくが、子供たちが蛇に噛まれてしまったり、バイクに轢かれてしまったりする危険性がある。だから村には保育園が必要だが、ただでさえ低い年収のなか村人でお金を出し合って校舎を建てるのは難しい。それでも屋根のない簡易な建物を作ったり、小学校1年生の教室に保育園児も一緒に入れたりできる工夫はしてきた。だが冬場は凍り付くように寒かったり、小学生の教育がままならなくなったりと問題は相次いでいる。村で出せるお金は出し合って、先生も連れてくるので、足りない分をどうか支援してほしい。これが村人たちの訴えだった。想像していたよりも遥かに厳しい現実を、淡々と、だが力強く話す村の代表者たちの目に、覚悟とプライドと、そして日本人への希望や期待を感じた。

すべての村のプレゼンテーションを聞いた後、私の中で1つ疑問が生まれた。3～5歳の子供の数の割合が0～2歳の子供の数の割合に比べて半数近くになっている村がある。他の村も共通して3～5歳の割合が極端に少ない。なぜ？ この疑問は周りの大人の方々も抱いたようで、みんな口々に言った。「出生率が上がったんじゃない？」「民主化が進んで少しずつ豊かにはなっているだろうから……。」確かにそれも考えられるけど何か引っかかる。でもこんな大人がいっぱいいる場でガキの私が発言していいものか……と悩んでいると、私の様子を見て隣に座っていた野口さんが質問してくださった。

「なぜ子供の割合がここまで違うのですか？」

村の代表者の答えはこうだった。「3歳まで生きられる子が少ないからです。」

愕然とした。村には病院がないので、子供が病気になってもすぐに治療することができない。日本では病院で簡単に治せるようなけがや病気でも、医療の乏しい彼らの村の赤ん坊がなれば命取りなのだ。これが貧困だ。これがこの国の現実だ。いくら民主化が進んだからって、いくらヤンゴンなどの都市部が都会化したって、貧困にあえぐ少数民族の暮らし

がそう簡単に目に見えて良くなるわけがないのだ。今私の目の前に座っている村人たちが抱える現実がこれなのだ。

それに対し私たちツアー参加者は村の情報を何も知らなかった。基本情報をコンダクター役の方に聞いたが「わからないので村人に直接聞いてください」の一点張り。本気で言ってるの？そんなのでいいの？と思った。彼らは村の期待を一身に背負ってここに来ているのに、なんの情報も持たない私たちが順位をつけていいのか。あまりにも無責任ではないだろうか。こんな軽い気持ちで彼らの前に座っていることが恥ずかしくて仕方がなかった。ここに到着する前にバスの中でもいいので村の基礎情報くらいは教えておいてほしかったと思う。



時間軸が前後するが、もう一つ私が日本人として悔しくなったことを書かせていただく。インレー湖でボートに乗りながら、首長族のいる店やロータス製品の店を見て回った後、1つの村に辿り着いた。ここで子供たちとゴミ拾いをする事になっていた。ツアコン役の人が言った。

「実は遅くなっちゃって子供たち1時間待たせてるんですよ。少し急ぎましょう。」

なぜそれを早く言ってロータス省かなかったのかと驚愕の事実戸惑いながら学校に向かい子供たちにミンガラバー。さあゴミ拾い、と思ったらまずお坊さんに挨拶に行くことに。ミャンマーではお坊さんが絶対的存在なので子供たちも分かってくれます、という言葉に促されお坊さんのもとへ挨拶に行き、さらに1時間子供たちを待たせる。やっと学校に戻ってきてさあゴミ拾いとなったときツアコンから一言

「時間ないので我々は15分ゴミ拾いして帰ります。」

この瞬間、私はこのツアーを友達に勧めたいという気持ちが失せてしまった。2時間待たされたとは思えない子供たちの笑顔を見て申し訳なくて泣きそうになりながら、私が思ったのは1つ。「支援って自己満足と紙一重だ。」たった15分、ゴミ拾い活動と称して、ゴミを拾う子供たちや私

たちの姿にカメラを向ければ、ご立派な『支援活動の写真』ができあがる。でもそれって本当の支援といえるのだろうか。子供たちや先生たちに日本人の私たちはどう映ったのだろうか。「私たち、こんなのでごめんね。」と言いたくて仕方なかった。

しかし子供たちが無邪気な笑顔で楽しそうにゴミ拾いをしてくれたこと、道端に座っていた地元のマイルドヤンキーたちが私たちの様子を見て道に捨ててあったゴミを持ってきてくれたこと、そして子供たちがゴミ拾いを切り上げてボート乗り場に戻っている最中振り返れば子供たちが私たちに手を振りながらゴミ拾いしている姿が見えたことで、この活動にも少しは意味があったのだらうとなんとか自分の心を静めることができた。

このようにこのスタディーツアーではあまりにも多くのことを経験しすぎた。自分のことが恥ずかしくなって、周りの大人に怒りが沸いて、それでもやっぱりただの学生である自分の無力さを感じて。自分のそれまでの甘い考え方なんてこてんぱんに潰された。毎日いろんなものを見て聞いて考えては混乱して、泣いて、大人たちに話を聞いてほしくて熱く語って、を繰り返していたらついに帰国前夜頭がショートしてぶっ倒れた。（ご迷惑をおかけしました……）



それくらい感情をぐちゃぐちゃにされたけど、そんなミャンマーを私は大好きになった。それはやっぱり人々の心の美しさに触れたからだと思う。『微笑みの国ミャンマー』とはよく言ったもので、この国ではお店の店員さんやホテルマンに限らず、子供たちや道ですれ違った人も、みんな目が合えばニコリと微笑んで「ミンガラバー（こんにちば）」と言ってくれる。そこから拙い英語とミャンマー語、そしてジェスチャーを交えて、楽しい会話が始まったりする。

言葉がわからないから、じっと目を見つめる。心の美しさ、優しさ、強さ。異国の地から来た私たちを温かく迎えてくれること、それと同時に日本人の私たちに期